遠征記

陸

4409
6

特
へ2
4409
6

鶏居

つなぐねあるところ、波よせられるふなぐ、ところの居
もちろん、柄の渡松の林ハ、ちこ、陽ゆたれど、洋ところ社
れ神の木の、千鳥れ法まこ、かゆられてきよわるこをど
りわれ竹のあこ戸城景ハ、よせしよく、景をもしのるろ
よろひとつぐろこを、力自ぐ、ろとぐめて、よ、や、行こ、かるめ
ふぐろす戸も、ろのまこめ景ハ、昔ハ、ゆろぐ、しるわ、を今
の守れひこちね神んどわびてもあるろを、敬こちりの

東京帝国大学

のゐんをとりまきてよりこのかたはるかに
しらぬ世のなかのようすをかたりつたへ
伝わり来たるものの初よりはうれどけふ世もちかけうとと
わびしきこゝろのうるよりはよりとも思ひ出るなか
んあるゝぬるゝあれうしきこゝろばいつでもうりのぐ
るしきをんつゞけて三十年のほどをわれらをみるうん我落
のまりわ神よりおそれうつくしきをしりうまつて
をろかあるうちまもるこゝろまもりはれこゝてあら
さるをとゝ人はもつて行よりくしとれをうるとるれば
ちゝをゝこゝろの人ゝうるんせるゝぬが行をゝとまれうゝ

きのうづゝをくぐるよりこゝもとも思ひでふ
だんしの後のもどりわ、秋の夕れゝゝに思ひるゝて伝れ
ばゝて外もづりわをうる行の戸やをうる拝ひゝまて寂れた
のゝんゝをて入ゝ星ゝゝゝみわ一乗寺人のわ
やゝきうなわ伝るよりはのゝわゝのいゝゝれうる来ある
をゝゝゝゝばうわよりぬゝゝゝぞ伝る雪ゝんのふゝよ家あけ
んゝのゝひゝはのゝよゝゝをゝてゝつれゝゝゝゝのゝ
よはゝをぬゝゝ行をゝゝれゝ家ゝよゝゝゝゝゝゝゝ
森浜をゝ建ゝゝゝてんゝのをゝ行ゝゝゝゝのわゝ
らはを神ゝゝのゝうゝれゝの棟は世の人ゝゝゝて拍

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ほ〻〻〻、三百四の久〻とをもちゐふごとをごゝろの方
なれば也、蜀の山九〻〻んまも拾つくわとて武部をもひ
ごゝろ度めて殷の名〻とゞ唐の代まなをもせもろり
やくの火をもなく〻卸んてはい〻くぶわまくぶわて義文
だれ〻ばらう〻〻ちの垣あやしげまめぐ〻せまふのなし
き御世まもと云ふまつて思ちゞ是一文
ぎんあごゝの宮尾花をうぶさ里末の杉のまゝにいく
まのしふごとまもあ〻ゞまして己ゞ友のやを度のひまを
よ稿ゞ〻のむ〻ろ彩ゞて侍ゞを家ゞとゞ思ろ〻〻
んまもゞ仮まて侍ふまて神まもゞ〻ふ〻れく、

れ程を志をゆ〻めわ、こゝハ神の御使して雪見ん〻宮をも
よ宮〻まもこゝを云ふ義人けゐ〻て家とりゞ〻れね
ゞゞゞんぬ〻ハ〻ろれ程ハ弱ゞもとゝ人ハ世物ゞ〻
ゞまもまなふ〻め強ゞ〻ハ宮ゞわハ〻まひてハ又ゞ
ろ〻ゞも楓の名まゞ〻ゞ〻ゞバ何して世を〻ひ
わ〻ん岩根ゞて〻ゞ杵築の宮つよ〻〻木ゞのふよ
〻ゞ裏よゞゞのね人入みゞれ代出て〻ゞ〻わみゞの
ゞゞ〻寺も様やゞ〻ゞ杓ゞゞ様の〻ゞ〻わまて八ゞれく
ゞろゞゞを〻れゞ〻ゞゞ〻ゞ〻ゞ〻

のぶ、紙仁のうたれふこ泣ふく人れ、おのゞ心のひくゝ日よ
ゝゝわわゝよぐゝよ、ひとゝせ、童の面ゐ名殘なるわ
時、一刧と云所ら是ゝよやと、人の浮ゝなゝ夢ハ浮世の詩
なゝで、天ゝふゝあぐゝうぐゝうなわゝを、獨ぐゞぶつよ
ハあゝで、　この海、靜かゝ代ゝを、氏ぐゞれ波の立居
をゞぶゝゝとゝゝを、むゞゝゝくゝゝわゞゞ云人ゝ、ゝけわ
ゝゝゝゝを、刀角ゝゝゝゝわゝゝよゝゝゝゝゝゝみわゞゝゝ
ゝゝゝよハゝゝよゝふゝう男ゝゝゝゝゝゝよハゝまゞゝゝよ
男ゝゝゝゝゝゝて、夜ふゝゝをゝゝゝゝゝゝ、云ゝゝゝゝと云、
義經ふゝゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ是れゝゝよ

せゝゝゝ、秋庚のゞ、笛をゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゞゞゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふゆもすぎぬるかと、日ごとに戸をあけぬるやうにぬぎぬ、花ぞ人
八田なるらぬ木立の頃すぎて、うぐひすのはつねもまれに成
つるかと、形わるるこゑよりぐぐ、ぐぐとなく、戸をもつくぐ、
遠きことねぐのてやゆふ、鳴るなる秋の末野のさよのあれを、
あ、我れ山のそこの男ぐるの、鹿の小笛よ秋の風ぞ、
寒野ぞ、ねぐ、ひとりひる夜ぞ、人の心をわづらはぬぞ
こゑかな自らよ、

ちぐさ、ちぐさ、ちぐさ、

[illegible]曰、造室法、倍[illegible]好云、室[illegible]為佳、[illegible]也、余[illegible]
其[illegible]云、[illegible]露東南仍設戸[illegible]戸[illegible]而收[illegible]、常式乃環[illegible]緣[illegible]、[illegible]
云也、戸外簾下、[illegible]常作或板[illegible]役[illegible]浴[illegible]衣[illegible]緣、[illegible]亟水[illegible]連
[illegible]引水[illegible]盥漱、又以灌庭中、[illegible]本室西北必牆、[illegible]數[illegible]低牆[illegible]
通風、豆腐[illegible]設戸[illegible]或垂[illegible]簾、[illegible]の北距牆[illegible]五六歩就[illegible]坐席、
西北渭植竹[illegible]遷、反日、東植接[illegible]相[illegible]十株、[illegible]浮[illegible]日、[illegible]酒必於室、
北異屋[illegible]牆、架板為安、[illegible]欄、左右阿[illegible]跌、[illegible]紅[illegible]五[illegible]、[illegible]俟[illegible]及
日、戸及日、[illegible]基[illegible]、[illegible]浮國[illegible]織[illegible]ふ[illegible]耐也、[illegible]製[illegible]ふ[illegible]消[illegible]
[illegible]室必於室東、[illegible]与酒[illegible]及世人与酒[illegible]諸[illegible]浴時、[illegible]大[illegible]浮[illegible]ふ、是
皆[illegible]燕居[illegible]室、及素窗四席、東六席、八席、而云居、其正堂、自[illegible]

[illegible]法、[illegible]ふ失[illegible]而[illegible]余性苦熱、夏日尿[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]
有素窗[illegible]式、四席、東六席、[illegible]造、依[illegible]制、不用緣、板磚地設
榻、或椅、皆倣漢人居、鑿地[illegible]設水盤、[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]西磚、[illegible]、[illegible]耐煩、敦[illegible]日、[illegible]制、林、[illegible]、[illegible]磚上、仍席、[illegible]常式、[illegible]
[illegible]室[illegible]、[illegible]別徹去、林、是、一室二用、浮[illegible]、[illegible]費三四十金、[illegible]
可辨矣、以時之且居、[illegible]不果、[illegible]、[illegible]遷、好事者、[illegible]謂為
他人、[illegible]姊、[illegible]、又西曰、[illegible]、[illegible]家、[illegible]、[illegible]居何必一室二用、[illegible]
接、[illegible]言、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、

そそろふ仕よハそなまぐれそむ尾バうわそとてそそろそち
男ひめぐらそそまぐなすこそひまぐくるよハ役おほつふそく
流よハ心ぞうわもそゆゑで南様ちの国よ昔ぞしるかど
俗初ぐこせ庵の今ハ荒よつそて野ちなわ一変それ光
れもひよそろまくよ彼そのせれ人の為よそふふうのそ
き者そ名のくんそハ笑へよ、うつハ牆狩けそぐふぞの
アそよそ、一宝僅ハ房中四房乃紀紙そ玉西房古四房ふ雪中
苟ふ和倚宮、南面亘房設戸南窗如常式戸ハ竹縁圓窓三沒乃
古房四尺七九尺西磚地三又ハ便昇洋縁ハ第竹造繕鏡底下
無茅蓋盃炎夏庭地立燥烟ハ茅蓋宮中ハ乃焚ふ鏡上或竹樹

一ハ倚肱宜紬涼宜敬月宮中東望豆四入酢蕊ふ書面一二幅
展敢写ふ北数壷瓶宜ふ机又小坑火燒架上盃飯茶具及求塩
写西望ハ整戸瓶ハ昇洋但仮容不入再其北一席量掃花紙帳
ハ為荒熱ハ被深ふ変北窓席、南戸迎風戸ハ板縁ハ底下
竹架上水庭港ハ被組寒ふ敢ハ堅ハ破ハ西北東回ハ
宇ハ廊東ふ廊乃豆水盤豆火燒沸手湯ハ遷奥也花小宝ハ堪ふ
暑扱屋上ハ竹ふ屋ふ豆東西強ハ篭下班茅屋ハ中蓋茅ハ沒
山嵐ふ宗宝瓶ハ深ふ花去年秋ハ中調戸ハ別栗田狩考ふ数
疑低昂紡後責際ふ雨浸ハ小泡扣對黒谷吉田峻宇房塔映常
竹樹ハ如盃丘浸田野似織或ハ所嘗水鶏或駐鶺鴒茅ハ拉風

胡ぞくの琴の音にもまがふべし。夫小籠が鶯囀濃淡恰似拗添而有
之。火燵の薬くゝ薄扶丸義志誠薄命くゝ病況今とゝ又何ぞ耶花木
之費々鹿一野報點而出矣。嗚斯云乃詮出而者咲是紅憂也。
何ぞ、きつのきぐゝ。山住ものどうかするのとよハあゝで、夜ハ毒あ
る蛇の爲ちいるとゝ冬ハ氣ゆゑ水の紅なゆゑれハいろに思ひ
きゆゝん花ハ散てもやうて出ぐゝひゝふぐりわのきゝ
であるれをきゝんやきゝ新なゝ又雪のうゝ日ハ寒ゝぐあ
るなぐも云つゝゝゝ世ぐほどのあわゝゝも打回るぐゝ心
のゝのふおわゝわ、ゝ住拵ゝ水ゝちゝるんれバゝ打
ゝゝゝれいんぐゝなの居人のまゝぐべうゝぬをさゝおもゝゆ、

又世の乱ゝ、彼の西都荒ゝあれゆけばぶぐ。うゝゝ物の虜ぐ
ゝわゝゝ事ゝつゝてゝゝゝゝひあわゝゝゝゝゝあれゝ、枸檬(ホゾ)打れ、
柱ゆゝぐゝてゝゝゝゝの風をやゝゝるゝゝん、うゝゝても世ゝ在ふべ
ゝハゝゝぎやゝれ大事ゝあほぐゝゝ生ゝん、ゝゝゝゝの殺つふ
つゝ打ぐゝゝゝぬゝハぶゝゝむべゝゝもあゝぐ打んぐ
心のゝのゝゝまぐゝハ汚京の打ゝゝの横家記のあわゝゝゝ、
宇治度の河出れてぐゝゝ西園寺ぐのゝ律の巫次(スイタ)母のゝ
荘なゝハ翁ぶゝいやゝゝ思ひゝてハ殺ぐゝわも打ぐゝゝ
ゝゝゝまぐゝきゝのゝゝ又大ぐゝゝをゆゝゝれ或ハやゝられて、
野ゝゝのゝ打ゝ人のゝくゝゝふゝゝゝつゝてゝあゝゝゝんゝゝゝ

中に、つのきのこゝのをかなどゝ、ふるくつゝふるさゝ
ゝまれ、みのゝどに、立てハ世をそゝわぶゝ、庵のゝ、ハ住
なりてハあるゝねく、病のゝ、ゝ業をなめわゝてそくいん
ゝあれんをゝるゝ、ゝやゝ、ゝのゝねゝ腹ハ、ゝゝくゝや、
其好ゝわゝゝ孫なんゝハ、ゝゝ下ゝのゝゝハ出ゝゝゝゝ
ゝゝ、ゝゝあゝわていゝゝやゝ人ゝん、帰ゝゝ業ゝの門ゝの
ゝゝて立ゝゝれ、四ゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝハ、濁れゝ澄ゝて、ゝ
ゝゝゝ、塩ゝの業ゝゝ打てゝゝあゝれゝ南のゝゝゝゝゝゝゝく
ゝゝむゝゝ、ゝゝびハ杉のゝゝゝゝゝゝゝ

遠山青霞匹練　曉野淡雲疎籟　菓花繡蒲　柔葉
丹素　素曙　秋夕　月秋旅雁　深文寒蛩　素雨
蒲　草露點　幽角延接　遠旦　野亦結夕　巡旦
待　素如金　雪為墩　紅葉鮮美　紅穀先嘗
を惜むべしとの
九月初雨　三冬無被　藁牀獨食　三月無蚊帳　紙衾
輙入　蜂結房人未知　蛛布網簾帛　蟆　蚊帳
妨賊　秋風蕭蕭言未　蚊蛙
或水渴或栄荒　無雨甘雨　野鼠飢穿墻　狐狸窠盜飯
旋云枯　菅草苦花　稅稻飛粒不納　又思苦樂偏風

雪殿　ふの出門　冥物　洪　宗直　先達　古人云　硯之發墨者必費筆
ふ　費筆　別　退墨　墨三法　筆　軍　紀　獨　硯也　大字　雜　結密　小字　帶　句　侵
真書　遠　不放　筆　苦　苦法　茶苦　思ふ　苦法　夏　惠ふ　練　筆　事　言ふ
然儒云世　遠　然　斯哉　言　文　ん　唐　さま　ハ　ものぐ　ぐ
一きくと五升の地主のとものよ立てよみびとなる物の尾綜
ものや光のほれしくて恒ねよそぐく秋の出ぬ　ぬ
ぐぐ　ぐ　ぐ　

かわよ、きさあしをもつくしのふぐこと未に成れる花
ばなのわかわ、そそそそぐよ立て水の流をくりくりて花をのく
そふそそそそるの風けぬるく野山のそをみをのうゝ引わて
ふそそと、ものゞ財なるぐるて蕚そるの心のいとそるぐるし、
水形ゞそそそそひおゞ見よ、日の出て落そひこそも、そそう
おくれ、そき、其元新そ八星ゞ歳をそう云ゞそそ、そゞ庵の彩
そそうゞそそそ六な枝をそ八、を馬をそそひて咲出そる
よ、其のゝ〳〵やゝ〳〵う思そて、いそむ〳〵そよ、嘗の未
来なのつゝ〳〵、又是ようきわ来て栄つくわなどそそ八ゝを
ばいゝうゞそうゝんそ、人のゝゞめるゝ人ゝそゝうわよ、

位なれ良もゝゝそゝ〳〵ゞなんゝ花のゝそ、ゝそゝそゝそ
そ、そゝゝ〳〵ふそて八、重よあつゞゝそゝそよき人の見
そんひて八美そ女房れ、形もてあゝ八ゝそそゝ、わのゝ
けそわそやし、今やう一年二年、扇をひろゞてまなび出る
そそゝそれんねぼそそめそれゞあゞわゝやゝ〳〵孫つゞゝ
ゝそ、枝もそそゝくゝうて手えそそれ、毒毎まあなれそそゝの
しゝられて八、この花をそゞゝゝまゝうゞと異ひなわぬそ八、を、
そゞゞに、あてなそそゝゞゝ見をゝぬそゝうゝおれわゝなそゝぐ
ゝやうゝなゞゞなれゞ、落そ八そそわゝ、そそもあそそ
ゝそめゆそそん生ゞ八、空とおゞひゝよ八、めゞも形そわて

見ゆるをやまぬのをあひ紙のうへなどまうちんてハまの
きわげなてぐそれをうせにあてやこのなん人の針目をし
うひねわぬひてめをせうんこ雲次ちの変う書けちる
まふくんをこいとめぞーとこ見れ髪の未をさわひ
ふひをこしあぐわるる人の御為ハいるむらくるやこ糸
ぼをいうるふーて世をてふうるぞーるんかの
ぐたぐひのぐハまぐにふるまぐけをやうをかにおて
ぬをめでーて行ようせん夏の末てをみぐれのしるる三
つなーつ後こぐれるを実をひろもてハせちをのいみぐも
のるふぐうわけるをしなどうをらやーまれもわるをもえん

めうつわをるハこれ花のをあひる紅んまるをぐ解あう
ひぐめの墨をづき黄ぐをなどーふるをるんれバこ変よわ
もうふて思ぐいやるこ花一叶の色とハ定めらるれ
ア変ふ風をこるををひてハひを和のほぐこ葡をてる
をうんうを変ハ昂をーーく依行のかるこ是をつまても
於もをーらこなわを、
河内國くを寺の狐の嵯ん尾ぐをむ彩の朱立ま、あぐま
をうわてのへるこ、をひるをもこめれをわぐるれバ也、
今や花の叶るをるハ芳聖武のこのど孔、西の池の変ろ
花のををを月のこれの日ま、御格びをーー倫をおぼーー出

てぞ、拙いつたなきわざなり、

僕已不才且ふまじ拙三十日影將七旬、心力彫殘、死後

每一人之有塵實者是ハト書藏于南禪山中西福寺今之

紅梅樹下且作搭ハテ託寺僧、後拙侯天命已於是二三名家ハ

先考ノ筆ノ文字呼不亦幸哉、

李伯齋

代筆何所餘、ハ臨ト書屏ト社南稼好ノ未所ノ完成ハテ寫生、

應物造化手十月渡ノ長秋影屬書反余也ノ和ノ又生天巧ノ後、

亦當當寄筆命鄉拙侍ノ久墨痕回時書ノ名餘不拙、

力丙

義之法貴不霸丙代梅樹動軒屈曲不撓、梅花紅蕚芳馥、堪歡會英

筆毒ノ文性義可貴于梅ノ、ノの不愧于義、余ノ詩性、耶畫ノ絶

塞其需云、

右二幸應端齋上ノ題言

南叡子

氏表宮記

客歲于役浪華吏事之餘、凡奇文、ノ是餘寄和ノ、後豈不已、頃凡

其人既見之常、元粉舍ノ嘗表其文、而氏人亦奇矣乃清山家記

義ノ不拔、不日而成、蓋倍ノ者ノ奇也、小杜所謂杜、訪韓筆然

其後似、庵姑ノ仇拔、余於義文ノ云、夫一見而傾、縞帶一絶、而

不復鼓琴、古人之於知己ノ如此者矣、今果寄義ノ氏表宮ノ

菊窓、一棺未蓋、菊子既休予心、氏於遠江、仕之京、与菊決矣、時菊無用於天壌間、くゝ〳〵心無用於菊、無用之用知者哉、菊矣、旬日昭〻、氏教冥〻昭〻之中、冥〻〻〻中心、冥〻〻〻中心、昭〻者否、是我獨菊而人所以不奇菊也、菊上岡氏、名秋成、字餘齋、一婦無賸、又婦住西、去客於京、棺をつくらせて、その蓋よりのつけゝる、

氏よ我の室とーまひバ世の中を秋の菊のもむへらわらう、

一日五梅の樹下よ拾ひてよめる、

信美

なぬさでハゆめみをれゞ梅の花をる我ゆゑ〻ゝ咲らん

信美

消のての雪をもとゝて咲出るまゝるれらめの花れをれをる

同

なをつくも書こひてふる雪のなをるゞや梅のいろをもむ〻ん

ものよめをこゝよ

紅をそゝぐことなすゝうよ菊てまし〻咲をうつろふをゞめと折くハ

嵐山夕嘆

光の世よ心とめねぞこのうをれをれ旅寐をやせん、

ひとゝ和れ其の枕をを夏ゞゝわよ花のをのを見つゝあのせ〻心

夏ハいゝのうををのなをうもををうしをんいめ破る嵐のふれ松芝

鶯むせびなく流の澄の色ぶむれ井る人のをハめとにハ手ひ
ねるもれ、うちづうぐひすもをいるとよ、をるる
人のをとゞろくの、ものれ胸さわぐるよハ立うくてあひなう
もるゝの乳やをゝ話よ行わのれてふのを水の面ゝれをて
ぬるをあやゝ花の影のを朧よるハうれ夏のゆぐひ
よゝうもうるゝ澄ゞにふハづれ夢のをぶゞしをハふぶ
雪垣よやをゝぶゝん木にのぼる鳥れ望をわても花よ霜ハ
ゝぬなるゞゝ河湖の鳥れ夢千代をゝぶくよるゝも、ひ
ゞんなる霜ゝういまるゝく耳ふゞるれゝよひ破枕なる
ぶる人ゝハあゝゞもやあゝをゝんゝ花のゆ巣の志ゞゝ

なるるよハハ千代の夢ハ移てふるの寒ゞとよやゆるん其の
花村の紅葉もをきハるのをなるハいざ弱なめてもも
ちめゝゞ、ちれゞをゝとハ世れゝをわをいちれるを巣の
文るを告るの夢の夢ハ花よをゝぬをて人ゝやをいゝ
ていぬゆゞよわうゝの夏波をゞるし流よむうひて
見れハ夕ゞゝみのゝれ夏ハてゝもみの色いをめてゝ
千影の秋をゞゝし月ゝをゆのまゝよ猶よゝるもをと
歴よハ流をうるをりをあれ年ゞとる移ゝてゝるをる
ゝろふをゝを、何のるゝをふゞをゝや南の夜れ箕の夢に流
うを人流ゝ居豆をひて神ゝれ裾を四て妻ゞゝゝゞ立

さひ海流ぞ〜んよや仏ふるゝ、ものふけふ、ふるうゝぞ生つゝぬ
ぶの、峯よりおりひのぐわ、迎よりうひ、波よりうれたまもまれひまじ、
殘きうの如、鑄ちよ似て、尾を殘、ものの乳、或八殘至つ潔なゝ、
流よ新んうきゝ〜づうを堅、ものよ指ぐゝ〜ものちうの情を
まぐしよを香きうみとぐんうまぶうぬうめねバ、花おもも
げよもんゆううれけうの面ものて、ものハうぐんの下染して、
きれむゝぐの高よひハ、月をのうゝ拾むよハあうぬの、何霧の
高ともえうぬ、峯よ豆昇りて、豆火うゝぶせうに豆わ
みちてふ雨ものうゝぐ、神ぶうづうれてくうぐもうゝわ
えうれバ、藩ものうぶうゝ殺ものうづくうゝ殺ものうぬ、殺

もうゝめぐ、ものふを盛のものれ、新のうぐのうれ
ぬ彩、本傳ふうぐひものうゝ無の面よ及ぐぬあうれを
世雨をうまうかゝねぐうゝのの日ぬを翅をのれて、物の花ぶ
うを、めひぬゝ、又ものうづのうのけてくぐうを、種も耳
歌ぐうをを、嘉呼あのれよのうわ一ハ出さ一れ家のと
のあ人れ、ぶの猿高ものうよ形ぐをんうどひてなれもう
と一、ものを泣ゝめ九ぶの彩めうの人ををいぐて、けふう花よ
猫ハ及うれ、ものぐうわれなぐめと形ものよ八ぶ者ゝぐ
ぶ高よ、あうれゝをゝゆうなわうわよひあうをのけぢ
めあゝぐも、九の及れ四美をみをいめの幻をちわうふを

[illegible]

夕波の新酒のうすゝ櫻花をゝ、若そゝぐれのやうにて、
面りのうちうちさゝ新の[illegible]もれて花のあるうちのゝ色、
いろわけ〳〵花のうちあさ霧の新のひとすゝれ明ぼのゝ[illegible]
山ちかくうゝうゝさゝ鶯の聲のきゝわけられのあゝ[illegible]

櫻天并序

洛東叡山、設櫻花宴于西嶺、云者無尤義、小川弟海、
[illegible]波然[illegible]、四山敷儀、[illegible]、郡十[illegible]人也、謂感[illegible]矣、

同樂

毎臨翁[illegible]夕曉篇、叙事屬人、[illegible]想不止、予復倣擊
賦櫻天篇、[illegible]聊貫餘勇而已、實然[illegible]二月十九日
也、

去立七十[illegible]日、[illegible]櫻候角、[illegible]月有閏、餘猶[illegible]
俟苟[illegible]抑、疫上京何[illegible]、[illegible]花、[illegible]中西嶺、[illegible]烟、[illegible]友人
杉[illegible]亀[illegible]行、絢峰[illegible]、[illegible]春、法法烟暖、[illegible]百、特[illegible]今、[illegible]蝶、[illegible]飛、[illegible]曹
投[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]
討、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]
合、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]

看花留客留花在山光水色互續妍石鶏呼雨自毒水
禽驚客時打更共琴屠鏤已生日起鬼拘孫主修の暖
色沼際又遊湯と花毒帳を如紙蒼潤白玉花魂王戎粉
世中女伺金女諸金欲解とも女模孫枕屏眠共主接珠
玉如蓋白雪彩鳳相後光沼更乱如五十私技記滅無諸
筆追遊おしに花事極多琴瑟共主共とも共濃妖
奇又音雪行沼又云歸牛燈下澄筆煙雨秋如茶煙
常餘芳

秋草

蜩の羽衣なつかしきもの秋を告る

仮のいとしろうれしられ頃ねの萩れ松いしをぶける野、味
ちうちぬるちぬるちぬ月の光も花ちしまはかわ玉
あくるあみわ白人をうひ出て野ぬるまーと云雲を名
葉ををうを員野を八ぬどらづられ為次の野べの秋萩の
どどぬをてあらかなるる取芝八まぶふもれくもいと
ぶぶうるるをるぶ神をををぐにてあむし野づの
をあけるあよくむををさの色花ーくあ松よみぶわて
をうしぬ物ををんひあちのよぶあわてれれば
おうちををんをのの原やて人をもとぶんゆをあ
れでーられどまのちーん神やるーんをーのぶよ

てものとしぶらも古代なる哥の姿ぐしの大和詞の形をくるまと
ひ出るとゝゝしていづくにもれ侍るゝゝよりまゝとゝゝ
秋萩花ゝゝやさんとてふのうを入ぬと枝をゝ枝ごと
ゝぐゝで家路ごゝんにと哥のゝゝまゝとゝゝ
あわゝやさ八千ゝ代めもゝ人をまゝうゝゝゝゝめ野の秋よ
めでゝ客ゝつゝゝせ侍幸あゝゝびなわゝと又歌ゝ侍
ゝれど今なゝぬゝゝの行世よ行かゝれ歩んて行ゝ哥
ゝ風も色ゝかゝぬゝ八ゝもはゝ里人のゝわをゝびみ
あゝゝて学ゝの日ゝの言をゝゝなゝ花のゝゝもあゝゝるい
ゝあゝゝゝゝゝゝゝれゝれどゝつゝゝ野垣のゝゝゝゝ

あゝびはてゝゝゝゝのゝゝ谷蓋のゝゝゝゝ野のゝゝゝゝ
八ゝ秋よほゝゝゝゝゝ八ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ入ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝ恥ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やまもりんのうぐひすのこゑもなつかしくて、をちこちうちかすみたる竹藪の岸にて垣根の柔れ望ひ出るうぐひすのつけ出すこゑ、うちてるんをバ、

秋萩の花をわれ入るすべはつゆ露とも出のなるしるし

歌人のいとさびしきやまぶきもこゝにも分のこゝろもしよ

うれよ麻ちるこゝろ侍れとこのひてみのこゝろさる武野の花

びこゝをさていづくれんとて芝生の屋ぬりひてこゝ

ちゝして羽織ぶうぶやれひもゝうちて桜わるみま

のこゝ亜ちゝ人こゝあやんげよ山の麻ぬりつをあゝ

野の鶯のこゝりこゝあちこゝ秋つまちんぐこと

る何れのうゝわごゝのいいこゝめづらうなうこゝ歌のわ、杯

の流あまゝうびちうよ歌を酔これてこゝみつの野を抱ぐせ

ゝ山法寺よこゝて山きゝ人歌ちこゝびうゝまゝいまねびを

うんこゝ人こゝけるのこゝぞバこゝて、井のうぶきこゝめこゝ

いこゝもれの妻よて、こゝいよわ、ゝまゝなびこゝる秋こゝ、

祝部基因

言葉のこゝ花恋のこゝちこゝ京古枝みこゝれて花こゝこゝ

度会氏麻呂

ゝのゝのこゝの野のこゝゆこゝ秋菊花花こゝわこゝの芸こゝ匂こゝ

高向日麻

萩はなれつゞりてさくらん藤をの刈るこゝろとゝぶれ野づの露ふ

大子法師

こゝとゝの野辺の萩ふりなりてをしのの通ふ花ハ人こゝろわ

和泉式部

高まどの宮出の松の神ゝわて露のむすぶ笑れ花ちる

鞍馬拉行

ちゝの花今盛なわ高まどの野ふいろわてひとやどわせん

やゝゆつけわてこゝてよめる、

義

ゆれてての枕はこゝのこゝ花人のゝこゝ行ふハ白ひて

行ゝれゝこゝゝ又宮のゝゝゝゝゝゝ酔ゝ花ゝ

てふゝぼゝゝこゝゝこゝこゝこ

みぐわのちゐ丸て八みやなよそ八このゆうしうろむわて
あわるゐほどに、ひとゑ小西井ろ〜ぎ、八びなゝくさふぐー
ろろ、庫やさ〜ーとゝまろ〜ひれバづどの底、ろひろうい
ろもれどこのなれよひねめづ〜ーそ、うれーびよ元そしれど
そ、ゑもまぐひそぐぬほど、底のをそれのれのぐろ井ぐ
ろ、ひさやめくほぐ、ろよろがひるやり戸ろ、れろろて
くろれ丸ろまどの紙八、あつりのゑをくろれろ〜てれ
ー火やけろと、八よびれとせバぬるれうろ〜やろて起
ろぐど、移ろて筆ゑあろねぐろいひんをを里西枕
の流八ろぐら浪や立、ふれぐよりゆろをねゆのぐのいろ

うひよろろくなど恋びろそ〜湾われりろぐゆや、
ふけゆくまーに、なろぐ移、岸のむろひの家ぐもれひりく
ろろさやげろ八、何ゑんぬ、ゑ八入ろ舟ろぐぐろ
ろ、あで、あれ乳みの風あろくぐ舟ろなわろわ野ろて、
小岡の豆ゑ男れ立ろて、祇田庄の神あびなろをひう
ふ、ふげ〜ろろろゑ仏ろわのーろわれれ式ゑのあーろる
しれぐゆぬろろのろれりゑ老ぐゑ〜ろろて八年ゆろの
なわろ、あーろを何ぐろわのろろゑで、富八ゆろゑまろ
ろろうわ、いゑ〜（よわ移よあひて移ぐろさぐろに戒
八ろびーろろ八、ろを移ぐゆろろんろぐる

て、奇よこゝろ〳〵ぐらう、ひとつよおぼしきめてこれ
ーむとのゝうわてハ心うなるわとやいとん、あをとうな
ひゝうるーとめとをとうぐてゝひとわおとゝてんなハ、
春の暮秋の夕ぐれ、とふぐーさハとうわ、今ハのけくも
思ーとうぬいるーつの戦ひの場の戦よせ絶てもゝ後つの
ぬあゝ野ゝれ尾花をぐやおのゝまゝよびよあひてん
よるあわ風をむとゝ花ハ思の火の飛をてんをゝくあをめ
ちゝまだハおらまぐひあせ、ちぐれ花をゝれぐーゝらゝん
ぐうを高のゝひあゝを続よ夕ぐとさゝで巧ゝうゝ花の
ゝ沖ぐゝ、行ーらぬ小草れ雨ゝ波花よりゝづゝ沖ゝ京、

木枯よゝわゝゝ何ゝれの唐紙のゝらゝしとゝちゝてゝこ
とゝゝゝし紙走ちのを、山の石紫のゝゝ波なゝゝ、この紙と
のこハ結をなゝむゝをゝぐゝゝゝ本の紙の歌ゝハ下よわゝぐ
みゝのゝぐむのゝぐゝのひーを思ぐハ六つゝのまれあゝ
ゝゝゝてゝゝゝぐよゝゝ秋ゝよゝをゝゝゝ人ハ春のゝぐ
ゝゝーよゝゝてゝたれゝめてあゝめ荒ゝゝの初の秋
の春といつぐハゆゝぐめぐハゝぐ思ふしゝ戸やゝ乳
つんとゝちげーきゝるゝぬゝ我ゝハゆめゝ春のゝわ
ぐーきゝとゝぐゝうあいゝーうぐハ秋ハやうゝ吟めゝん
小舟ぐれ漕ゝれてゝ、ゝのゝわぐゝゝゝハゝぐゝいゝゝ行ゝ

うん、へつらひ、ごの井うとしたちてさのわるハあらじの
やうく、咲のわわれば、おのがものつくちくぶをなわ
ちちよらしたや、秋のやぐわ立てをびうちーつ、いづちうん、
やをく起出て、戸やわらしたちうれば、雲の行ぐわうちを
まーふれ、あのあきをちをつ、これ大江の彩うれるをんれば
いつまれ花のうつもし、咲ぐうわ行きうのハあくを
れんひとくみのをわれば、秋のをむをちびーをもいと
いとなつのうてぐりつるをうるこ、はよをハ雲を出秋の
ぐつるれをとををくなぐーー出れて秋、
一本ぐ八法えぬ彩ようをくなる夢をえ秋のし取ハ

多八本ようれをうで大雲をうをゆ秋雲をつれ
賀寛く秋、寄色于流先生伝業大江橋塊寓舎ニ日、一
抜天ニ三更、四壁蕭寂、清風劉亮、恰如在芳野皮濤
之中、詩次偶及秋聲、洗先生乎我ハ乃文、予走
筆記之、時文学矣、嗚呼斯文捜索古人之迹矣、
而思哉、詩者之音歟、欧公題不錯也

享和癸亥秋、晦、表、整従于大江橋西、偶風雨暴至、
不堪寒、今庚寅、既百有小年、而通家業、

倩好逑于先生及嘆天の情を述べ文法を獲て新しく美妙
不文法若干賞ふ能はず甚だ美妙生の技倆其宗旨磯
吉賞不及熟読終篇感服甚好き意見因後、

十時橋匠

之條

あしたまるやれしうわ物ぎこのたれも立ちせる来ぬ風の
ふぶけるあのひとしむらたのぼる望のこぼれいたて
とあるを、あしたのしらやの姫の神のあのびるひ
て雨ぶれあれば抜るまぶたち会はまぐるぬれとあわて秋
をつの寒どよりやなげのやどわれ死の法るれば一なるを、

こちらくなげく人のあるふいのしらめを夕野べよりわて
しるやれみぶれ花浮人のまぶれりてけづわるをのめる、
あしたをのくしねぶ為れ菱の家居ぶるるるて心
ゆくまろこびらえなるわ一枝昔ぬとんちをよ雲立ちを
なりてふるる俗つ、かりちをらぶるぬるもこちるるわ
しを尼のつるるる嬢しられ雨しるの雨やふ、おるせぬるぶ
すを家をうるる面をるるるて、秋ぶぶれね菱もあるぶを
と、炭ををほるるぶ家主をせてちるるるわ立ちる面秋
の物ぶるわて人ちるるるるるるるるるるるわの秋ぶ也
夢ちるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

されてゐるけものわらはし、みやびごとごとに出まゐる後、昔
の帝のゝしれば、ものゝ
おほぢぶひをとゝ、板をゝ
さくわゝるれば民のなげきもなしとぞ、ちつ水をは
ていひしを一歌あるべのゝちやどりをば、喜雨亭と
なんゐいつけゝるやゝ、ゝひの面をうれしおりふしに、
うつゝ喜びのあらわ也、あれおりろれ彩のさづくやさて、
戸ゝゝやゝゝかうゝん、れば、くゝ取るも建ぶゝれ
おぶれあるゝり、公のゝぶして、落ゝ雲ゝゝゝゝひ
ゝゝおぶゝゝも、野姫のあゝゝ、ゝひ、ゝぶに

おぶゝ、ぶゝせて、おゐけなゝ神ゝゝぶけゝんゝと
のゝぶけをよけゝゝあびたゝゝんぶで、世ゝゝひ
ゝぶゝわゝゝん箱ゝゝ、
い物ゝや、ゝのあゝわれ面ぶゝわ、文ゝ一宗、昔也ゝわ、
ゝと歌、婚ゝゝゝゝれ面、昔ゝゝぬ意の花ゝゝ
みの松ゝ何ゝゝれめて、ゝを続ゝゝやぶゝわの面ゝゝわゝ、
享和癸亥弥月廿一日の表、ひゝわゝゝを、ゝゝゝゝ
おゝゝゝを、廿ゝ日のあゝゝゝのゝ、ゝあぬ、

ようつる

ひとハ、瑚廻尼のことをなわすれたに、又めのられ
やうをてめーまろうせーこーろーみめの多ようわー
ををこ形間ーなげまて、養ぐわをおさーせわぐ
ろに、書あらそうべるにあるねどこの ふぐるれ
きちんよ、あいつ孫つ
養は六いのけぐめを立ぬなぐて八宮との炬ふまやうつの
いめてふなんまーてやうろなるんのるひなわけ、
幻れ人のゆくんをぐぬをバ形のぐ心ようくるなわけわ、
霜こ間わ風いるう多にーいも表をいの孫ぐめぐろうにも、

きぐーまどろむやうるる枕を形どろーてくる人あり絵
なーんめーろうびげてえれバうれことせぐほど、為をいるち
るこーづるーうぐるーうるわ、松山貞光 俤称いを経波よわまるれちわー
後ハうわ和ぶーれやうにい日どろるるせーうるくうるひ寿
るれいとぶげるなろうーをえいうるーびれるいの
ろ形ををうんぶりとなくてのうるいけわーをるひめぐ
うるれるは使ーてまるぐで俤るーなわで今いすて俤るき
る府よゆくわなくいるきあひまわーうばはあわるさーうる
はむうるめのは事系ともまめ回ーて は宮ぐうーまわーやう
をまるぐうるに物ぐるわやるーに俤わーよバいるうをーよるは

いとほしきものにらぬるハあるべねど、國の境あわてゝ
おのゝなるわるれバいまてゝんをもまもるゝなり
つらいとうんとまもるゝハ形ばかりてぞかんうと
なハ六十九ばかりぞうこゝいとひてん仮はつけてゝひ
とうゝかきのてゝてゝるひぬ粒のるひゝぞこれつゝて
さゝげ出ることゝいうぶくわて投さんをバいびをれさやう
なる紙なをいのゝとゝわなるめくゝるいるゝわ
ちばゝんをゝぬかどく形ばゝをゝまめ人のうるを
けバこゝゐなんゐい仕ゝゝるゝて甚秋ゝゝ所もなく
年月ゐいひて、指形ゝぶもゐわぞさゐバ形ゐれゐ草形ふ

ゝるゝるゝあゝぞれ人、器の江れ小淡の呪、あゝてゝる
んゝゝをせゐゝゐぬ法員のいゝゝう処ゝ生、者れ法ゝに、
いゝぞゝゐくゝほゝゝし海川ゐも入てんなゝぞゝゝくゝゐし
ゐゝるゝゝ、うゝて耳ゐ五ゝ仿わゝを、今もゝいゝゝを玉なゝど
のゝゝうひ出使いゝを形ゐゝのゝるく男ふゐゝらゐゝなゐわ法
むゝゐめのゝゝるゝなゝぬゝてゝなゐゝゝゝるゝ人の心れ
ゐハ甚函の妙ゝゝと、ゐゝゐゐ人ゐゝゐゝゝゝゝ世にゐあゐゐ人
やハあるゐゐを形れバナゝゝゝてゝゐゝを磨ゝて法家ゝゝく
ゝゝ安ゐゝほゝゝゝゝゐゝゝゝれゝゝく形ゐゝも
紙ゝゝひゝぞゐゝゝんゝゝゝゝゝゝぬゝのゝゝゝゐけ

なるものは考へるほどひとまわり小松の様に
おつるものゝふるまひなく落ちぶれなるふと
ほーきの一そぐとなんふうに打ぶーみぬるもれのう
いつまでもその我を拾をんのはるこち言いとなんにあ
きわのうづけなう承伝ち打よ〳〵とて人のいむなる
をもかぶーきわつふまでまはぶんぜうちいちもをべ
なるれはなるひちく世よまてれうをむこよいひく
ぶーまへをを詮もあてーさりのよやうふすわは
ひうわくうーのはとくんまうとかりふはは世も粉ま
ぞーのうせまうんぐいはーまお粗ひうんかはうよ

ヲ形ひうんかいでは心なうせも出ぐりのぶうう
いつぐは体よねまうくまるためーよもうぶいうはうー
うれどぶうぐんれのよわるうわうぐーくや
えうのうつあしかのーーもかまうー
よまつ仮千歳の石もとわやらんあな数なき君心ハ、
うつりて小形よ〳〵ーーう、
よこうて今八國ぐひつれど野中の清水ものうるさ
ーのものなうぐいうぐけなまよろづよくねんぐてん
とのへ竹のねぐのめなーうも松をーくうわやぐぐバ
とてぶのうにぶぐ言うぐうくて、

むかし人のいへる、國を去、うまやに入てきれふわを
をさゞをあそびてのつゝぞろ八何人ぞや、是を狂蕩の人と
云、又寺院よりわかれをひゞうきんをのこつゝめ形の
きをいのなわんをつわんぬ八何人ぞや、是を智識の人
ごゝろ、ふつゝにきを出ふゝ、ゑぬやうをのぐれど、
そゝぐ〳〵まゝ才ゝ若しきんわ八狂蕩の人と呼れく
拙ぞん、一つぶに、うれて眼をゝ八ふけて何をん死八ゆ
ゝ只今ゝ迄いん國つゝ八いふゞびなり、
元放つ十二の品ゝやうけゝぶ越んよゆゞてようつひ〳〵坂、
是あれおむつゝぐゝ弱をゝてとうゝぐゝをうぐゝうゝまわ

てゝゝゝゝ八、のゆゝをうゝて逢うハゝみゝゝをまめ鼓呼煮
てあるやらとれぼつゝうゝくし八んゝくゝ出てきゝゝ人ゝゝひ
ゝ、ゆをめぬあれ恥ゝ、ゑをのゝまわゝ八、ゝくあをちゝうれ
ゝ爰ゝ八ゝゝをゝのわゝ

附録

露分衣

湖月尼

あるしなしかの一つなる秋をいつの日まで忘るゝ煙の下に拾ひそめしを、みるかの逢ひそめ所に紛れぐ我をもとられぬるぶつまでもとゞ伝わて、都の三条河原なる法いちゝ云ふ所げまうづゝ、ゝまゝ今文いまも彼れのそぐろ、ゝ彼りうてぶ、法華世に在ても身をなぐゝくいつまで秋の河ひまれ行、七月十日あまわ、日れをみまぐれの西八秋等ていづゝゝぶ行れぐゝあのむゝ、下

の社の森法ゝ林ぬゝやうをゝかるわ一世ゝをゝるひ一秋をの逢ひまゝうわゝふゝ浸ひまゝゝせゝしば都の名ゝゝき所ゝも老ゆく今ゝまで西ゝ人ぶ今の毋男の形ゝゝゝ世ゝいつのでゝ思ひをゝゝゝゝゝゝゝゝゝ役ゝゝゝゝゝ

ゝ野ゝゝゝはまぐわぬれいゝめぐゝ一ゝ紛の川ゝゝ形ゝ

ゝ指ぐゝれやうゝ匂ひうゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝ、

秋ゝゝゝ、ゝなゝぬ枝ゝいゝぐゝれの西ゝ

ゝば、ゝゝれゝゝれゝゝゝ八ゝゝゝ下風ゝゝぐめぐゝ

ゝゝゝゝゝゝ八ゝゝゝゝけれぐゝゝゝゝゝけ

ゝの法華ぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれていゝ西ゝゝゝれ

ん、十日まわりの月を、清涼殿よんでぐ出てきと、
うまひとのはめらう〜のつ〜まるさて、ぶのゞ夜よ和
ぶわ〜つの梅津の里の梅の咲れうわともむ〜ひつれ
ぞ、ふい面白わ〜ゆくうまるしうて、そうう紫、草の花う
し立むうくよろづのまぶ、ぶろうゆうくわ、ぶ、ちうまうぶ
のうまぶ、ぶうくゆうう、ゆううとうて、　時みるりみぶれ秋
とうゆうて、えまのりれうれ〜うわうよひ〜〜ゆうとひ
てのすくどゞぞうう野の草枕むうぶんてあれぶうれゞう
立ぶ、ぶうの野の厩離庵うゆ、ぶ、ひよう〜ゆゆの
ア〜てゞわわなくやどわうとめ侍うよ定うゆうあうゞ

なくぶ、ぶ、うて思そまで出うるぶうもなめ〜うぶい
ほわ八、昔京極の中納うの君の、老て住るひ〜ゆ住うて、世世の
うとうう柳の井てふ泉あわ又ゆむうとこのうんざい大納言
殿の御墓のうう〜もうてゆうまうわいほわのうぶうぞうひ世
よ似ぶ、木立物ふわ、砂の苔ぶうむ〜うう露ちう〜つて
うゞぶ〜ぶのうれよわわぶれうれやうわあつめうう
あうれうの、ぶまうて思ゆうゞう、ゆ〜よわ杉ひ〜
よわも悲〜よ八、武野の庵の秋々言、月まくう〜のゞう、
雲ぶうれゞう、　いくうゆうう、け〜思ひの雲うれぬぶ今夫
の野也れ秋の表れうん世うれゞや、うてうう八〜のう〜せ

多くは、里ちかのあるを命ぜ、拾はんと、嶺の山のふもの紅葉は
ハまつの風にしたがひ、なびくもなしと、ひとへに、われ、
きぬの野の系のやどりて、心くまなくうつる月をうらんれなるめ
てあれば、　秋風よ、雲のうへにもたちなれ、みのさよふめ
ゐ表の月、義、　露ふる秋の庭を出ずて、所がらなる月もまや
けさ、山風やひくといふものなくぞ、名残あれぐぶーぬ、あくる
あーさ、この野のくまぐしわるうんんをぶめるひーもふの
ろーけくぐあるるゐ、待ふの猶れ心よのうわて、ずるゐゆ
く、大沢の池れ面ハ、木葉ぬうきて、秋葉の彩きんぞ、梅が畑
ふふるるふ、ふんをバ、　深うるぬ猶るぐるよ、久れりるく光

をりみづとやうもふれいひるるをせるるむぐも庭の題を
水面ちねど露を時雨もいらぬ林なわやわくるよーれ
おちーて、山づと一枝ゆくるをとけーるぐーてとぐれ尾の梅よ
たるどみんれば、くなん思ふまるわていとをるーく
深ゆーふとと、ふ光のまぐゆきて、いらぐぐきやうもをる
ぐて、いねちるうれば、梅津の絵とけの花くるわるひ林
て、梅わびゆくわ、山づとんせ、ふれ、　多ちく一枝ゆるる
るる絵ふらひれる紫の深るるめぬを、梅ぐるわるぐるわ一
て義ををぬ、光ゆくわぐて、河辺ゆ山るる月をんる梅れ光、
山の名れあるに、雲れ会ゆて、川とるやけを月をんる

こゝ[illegible]、[illegible]の、[illegible]川、[illegible]澄[illegible]ぶく月うごの、[illegible]ハ[illegible]
の波[illegible]もん[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ

そのうせる心そぐなわとぐ〳〵ふの淀川の流世よなう
ぶ氣なりとやわすて、　　芭蕉
れ秋のそやまゝゝんをバ氣ハ云、芭のあ〜ゝ秋の夕べ
ゝまをれとゝのう奇うるせるつわ秋をこゝのうるいて
ハ大淀れ家のちゝらくのゝ思つわ〜ぬうぶ姫のゝふぞつの
をつのぞ〜ゝるゝすゝひていひ〜をいと古代よわも年ひして
ぬゝゝゝゝ、杯の流のうゝびなるゝ酔ひ淀ゝろびゝゝの八姫
をけの由ゝをゝ〜ゝのぞわゝ〜つ河をわゝりて法ゝん松の尾、
月淀の社ぬゝめぐわつゝゝや〜ゝろのう要方寺よゝるけのゝ〜
もなうぞぐうわ深ていゝゝるほびゝるわけ庭のゝ〜ぞまひ

世ゝゝゝゝ、昔ハ流瑞の園をいふゝゝゝゝ

べのなぐさめのしるべとなれかし、笠のひまよりとびあがつて、表
をてらすこゝろ、月とあらそひて残んん、

夜野の露

田舍の居る、屋敷の濱松風よをむるあわらわ、多の病ふる
さんほどをのこゝろ初なるいほりて住るわび姫の涙よ、
世を窮しまるが、就そらの住人あわ、心ぞ一れ出るわらしば、
新々ひとつ、ねぶるまくらけるあをむ
うくをのこゝろ生れをうづまてゝんをいと忙ほるや
うに、玉の光をくしてめでるわられぬ強もしよろこ
びあくわらわるのゝろこゝ病して死なわ、

年月ふるほどにあひぎやうづよ、をとくはらひて、笠までと
ゝもくゝんゆるを、ねいこゝろ、くゝうわてゝ、なれなめるやう
をてをとる物よ、勝のこゝる浜垂ていこゝ一こゝろ、我
ハまして、生をのこゝづくやうて、菊の物、形のゝりのを
ぬひつゞりて、世をぞ、わハやこゝ、ゝとの笠一ぞ
ゝりこゝハあやゝうねぞ、わ最むりのをこゝ、こつよ
なわゝ物の秋の比よわふこゝもなやゝげて、こゝくゝなる
をこゝんゝもやうゝおこゝんつゝ物こゝ、菊
のをこゝんせるくゝとこゝるゝ、ゝ、ゝ、

くて、ゆも記るゝ〜バうわなるゝ人の哀みるまで、いづれのは神、
こ仏まとをわ於とわるふ、ハあ〜ゝと花ばをうれんうう
やうれ吋ハおゝのこるゝと者るまゝゝよとと府ゝ花るれるる、
日ああゆこてゝるゝくゝごさわゞゝゝて廿あづけゝいさ
つれどゝいうゝせん、こわの心をとまるゝなくてるこのほゞに
いゝきのこれしかくいみでゝこと沉れし、者わ、ゑの秋のい
ほゞとうの物ことをうゝ云日ゝるをびゝきゝすゝへゝるゝゆむなゝ
くはぬ、あれやゝくゝ泣ゝ者ゝゞゝうひなゝ、翁足ゞわゝて
つゝ、夢をあげてないのゝくわ、是をゝえゝるめゝくゝるゝくゝて、い
うれゝうゝえゝくゝせゝるゝや、祝ゝまゝをわゝおひゝゝるゝん者ゞでゝをゝと

やゝ者ゝ、ゝくゝやゝゞゝうゝゝしゝ於ゝてゝをゝゝるゝふゝりれゝを、今ハ
何ゝもゝくゝうゝひゝなゝくゝゞゝと、枕ゝるゝのゝを獨ゞゝゝるゝゝふゝゝ心ゝゝゝゞゝ
ゞゝハゝゝゝゝゝゝゞゝゝゝゝゝゝ

いちまるまるまる

そいてんうるしかく、ぢこーろ、ぢこ、ろ、ぢ、ぢ、ぢ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

以清辞為文所謂豪傑之士者我藤
偏於古而聲牙難讀豐偏於淳而
餖飣可厭蓋國文之難而其弊乎
辛酉祇役浪華得見餘齋翁邂逅
相遇願適誘劇翁手圭歌若文數
篇見贈吉光片羽可以為儀意在筆
先如不覺其難者我甲子首崎仍〻
命倉皇上道〻道浪華再見翁〻年
七十禁絶筆硯平生所著茲〻書次院乎

昇道師者与翁善固請上木要閲〻
壽而亦未到爲崎視事簿書堆案餘
暇倫閒略綴數語郵致諸昇道師亦
知要之所蘊能中翁意否
文化紀元甲子仲冬之吉 江戸大田覃
圭於瓊浦客舍

文化丁卯春發行

江戸　須原屋　平助
大坂　大野木市兵衛
京都　小川　五兵衛
菊屋　源兵衛